連載

サンダル履き気ままの旅 10

◇癒しの旅なら、中国（昆明と桂林）だが…◇

寺井 融
Terai Toru

ロングステイ財団の役員をやっているためか、「どこがいいですか」と最適地を訊かれる。「だらっとするならダラット（ベトナム）、ぼけっとするならプーケット（タイ）、迷っているなら昆明（中国）」と答えてきた。

温暖で過ごしやすい崑明 家族連れで賑わう温泉郷

さて、その昆明である。

何よりも気候がよい。年平均最高温度が二十一・四度で最低が十・九度。「春城」の別称もあるぐらいで、すこぶる過ごしやすい。三百万都市で、周辺部をいれると六百万人を越える。高速道路が走り、ビルも多く、辺境の都という趣ではない。

西に車を四十四キロメートル走らせると、安寧市に入る。明の正徳六年（一五一一）年に発見された温泉郷（拙著「サンダル履き週末旅行」参照）で、温泉賓館、遊泳館、一号楼といったホテルや旅館が、二十軒ぐらい建ち並んでいる。大和元氣という源泉を見学した。利用料金は林浴（シャワー）が十元。小間浴室五十元、大間浴室六十元とあり（一元は本年二月末現在、約十六円）、いずれも個室であって、大浴場はなかった。

部屋は、床も壁も白いタイルが敷き詰められてあった。ホーロびきの洗面器も置いてあり、消毒液の匂いもかすかにした。

「清潔感あふれていますねぇ」と同行氏。

「一昔前の田舎の病院みたいだね」と私。

浴槽があって、簡易ベッドもあった。風呂につかって疲れたら、横になる。日本人の感覚からすると、ひとっ風呂浴びたら、浴衣で畳敷きの大広間でビールをぐいっとやって、カラオケとなるのが定番だが、昆明はちょっと違う。

温泉プールが併設されているホテルも多く、子供連れの家族らでにぎわっている。通りには、キオスクみたいな売店があって、雑誌、新聞、お菓子のほか、水着や浮き輪、フィルムなども売っていた。

近代的な昆明市内

健康ランドには日本食も 雲南省はマツタケが本場

昆明市内に戻る。「富士の湯」という健康ランドに入った。

入り口でスリッパにはきかえる。受付でタオルとパンツを手渡され、ロッカーで着替える。脱衣場から、一歩中に入ると、大浴場のほか、ここにも、ぬるめの室内プールもあった。漢方浴、泡風呂、寝風呂、露天風呂に千蒸房（サウナ）や温蒸房（ミントサウナ）、カラオケやマッサージ、日本食レストランまでもがそろっている。経営者は、日本留学経験がある上海人だそうな。

小鳥を見る昆明市民（花鳥市場の路地で）

広東省や福建省からの旅行客が多いため、海鮮シャブシャブが売りの店が競っている通りがある。海老や蟹、白身魚に野菜、そして肉まで入れて、パクパク食べ、黄色いチヂレ麺で締めた。

「鍋は一番ですね」と友が言うので、「これにマツタケだなぁ」と贅沢を言った。

雲南省は、マツタケの本場である。九月なら、お土産にしたらよい。十本ほど入って一箱一万五千円ぐらい。漢方薬ともども、重要な日本への輸出品なのである。

また、国際級のゴルフ場が、四箇所営業している。特に、昆明春城ゴルフ場は、ジャック・ニクラウス設計の36ホールの本格派である。グリーンはよく手入れされており、友が一打ところ、三打もたたき、走りまわった体験もある。

ほかに雲南省には、日本の南方方面軍がビルマ戦線から出張り、援蒋ルートを断とうとして奮戦して玉砕した地・拉孟がある。一度、線香をたむけたいと思っている。かなうなら、ミャンマーのムセに抜け、ラシオ温泉に行ってみたい。以前、行ったとき、「歓迎光臨」の看板が立っていた。中国からの旅行者が多いのかもしれない。

桂林市でゆったり川遊び 「ギブミー」行動に心痛む

話しは、替わる。

香港から足を伸ばす先として、人気がある広西チワン自治区の桂林市。川沿いに、親指を突きたてたような山々が続き、南画の世界を思わせる。サントリーのウーロン茶のCMで、ゆったりした風景が話題となった。ツアー客は、こぞって漓江下り、つまり川遊びを楽しむ。

漓江の風景（桂林）

一九九五年秋、その観光船に乗り込んだ。日本からの訪中団が、われわれの八人のほかもう一組。さらに個人旅行の欧米人が数人乗り合わせていた。彼ら訪中団は、北陸某県のゲートボール協会役員で、十数人はいたのではないか。

岸を離れたとたん、ビールを飲み始め、大声で歌い、論じまくり、土産物売りのおばさんを冷やかす。掛け軸に、ぴったりの静かな風景を堪能するという考えは、始めからないようであった。

水量も増え、蛇行も大きくなってきたハイライトのあたりである。秘書長の名札をつけた六十歳ぐらいの男が、デッキに出てきた。ゴルフズボン

のポケットに手をつっこんだと思ったら、やおら川で泳いでいた子供たちめがけて、何かを投げ込んだ。

「ハロー」「ハロー」

口々に裸の少年たちが叫んでいる。どうやら百円玉を投げているようだ。取り損ねた子供たちは、必死にもぐって川底を探す。また、違う子供は、片手をあげて「プリーズ」と叫んでいた。「ギブミー・チョコレート」の世界を知っている世代だけに、心が痛む。

一枚でも多くもらおうと、泳いで船に近寄ってくる子もいた。もみあげの長い、くせの強い風貌の「秘書長」氏は、ニカッと笑って、またポケットに手をつっこんでいる。中国人の船員が赤い布をつけた棒で、甲板をたたき、男に抗議しているが、無視と決め込んでいる。おばさんたちもやってきて、ミカンやお菓子を投げ出した。わが団のM女史が、「やめて」と叫んだ。われわれも「やめろよ」といった。やっと、にわか銭形平次一行は、引っ込んだ。

少数民族の結婚式の衣装を着る客（桂林のテーマパーク）

少数民族の踊り（桂林のテーマパーク）

地元のガイド氏によれば「子供たちには、大人の親分がいる」そうだ。まるで、現代版「越後獅子」の世界である。

後日談がある。M女史が、産経新聞に、ことの一部始終を投書し、紙面に掲載された。その後、漓江では組織だった「ギブミー」行動は、なくなったときく。

鶏ガラ風のヘビのスープ アルマジロの〝角煮料理〟

桂林には、ほかに鐘乳洞や民族博物館など見所も多い。

それよりも印象深かったのは、特別料理である。ヘビのスープは、骨っぽい鶏ガラスープみたいだったが、飲みにくくはなかった。アルマジロが、角煮みたいな料理として出てきた。獣の臭いが強烈で、お世辞にも美味とはいえず、友は「タヌキに似ている味だね」と評した。その友は、顔が丸く、濃い系である。これぞ究極の「共食い」。おかしくなった。

《参考文献》
菊間潤吾監修『中国の真髄』新潮社
鎌澤久也著『雲南最深部への旅』（株）めこん
寺井融著『サンダル履き週末旅行』竹内書店新社

■てらいとおる　昭和22年北海道生まれ。46年、中大法卒。雑誌編集者、新聞記者を経て現在、尚美学園大学非常勤講師、ロングステイ財団広報委員、日本旅行作家協会会員。『サンダル履き週末旅行』（竹内書店新社）をはじめとする旅行記のほか、エッセイ『裏方物語』（時評社）がある。